

外国人留学生の日本語能力向上の課題

——来日間もない留学生の作文を基に——

平 田 歩

1. はじめに

10年ほど前までは、日本に滞在していない外国人が、日本の大学や専門学校に現地から直接入学することは困難なことだと考えられていた。そのため、日本の大学に入学するためには、まず、日本語学校に入り「就学生」として日本語の習得を目指し、その後日本で大学を受験するというのが一般的であった。しかし、1986年以降、留学生に対する入管法が緩和されたことにより、海外から直接日本の大学に入学できる外国人が増えた。日本の大学に進学を目指す外国人にとって、日本語学校を経由せずにダイレクトに大学に入学できるというのは、経済的、時間的に負担の軽減になっているにちがいない。しかしながら日本語のレベルでは不安要素を多く抱えているという問題がある。入管法が緩和されたとは言っても、入学資格に掲げられている日本語のレベルは日本語能力試験1級程度（専門学校では2級）と高く、海外にいながらにしてこれほどの日本語能力を求めるといふところに矛盾を感じるが、たとえ日本語能力があったとしても、実際に日本で日本語を使ってみると自国で学んだこととは相違があったり、間違いを訂正されないまま身につけてしまったことなどが影響して、日本の大学で勉強しているわりには日本語が伸びないという問題に直面することになる。

本稿では、自国から日本の大学に直接入学した外国人留学生に対して日本語能力向上のためにどのような取り組みが必要なのか、来日間もない留学生が書いた作文を基に考察する。

2. 日本に留学する動機と日本語能力

日本に留学し日本で生活しながら日本語を学ぶと誰でも日本語ができるようになる、或いは、自国にいたときよりも飛躍的に伸びるといふことを期待し、またそれが当然のことと考えられていることがある。更には、何の努力をしなくても日本にいるのだから自然と日本語は身につくに決まっていると考えられていることさえあり得る。大学では、専攻や科目にもよるが基本的に授業は日本語で行われる。となれば、大学入学までにそれに堪えられるだけの日本語能力が備わっ

ていなければならないが、現状はどうだろうか。日本語が未熟な外国人は、どのような理由で直接日本の大学に留学しようと思うのか、大学卒業時における日本語能力の到達目標をどこに置いているのだろうか。

留学生の受け入れ推進施策に関する行政評価（平成17年 総務省行政評価局調べ）によると、私費留学生として自国から直接、日本の大学に留学した動機として最も多いのが「日本語を学びたいから」（38.6%）という回答であった。次いで「日本文化への興味」「科学技術を学ぶこと」「学位の取得」などがあげられている。さらになぜ、他の国ではなく「日本」なのかということについて、同調査結果から「その国（日本）の言葉を勉強していたから」という回答が51%あることも明らかにされており、このことは来日した留学生のうち、70%以上の者が留学先として日本を第一志望としていたという結果とも関係があると考えられる。学習機関、ネイティブ教師から習ったかどうか、学習時間などは不明ではあるが、日本の大学に留学しようと思う外国人の半数は自国で日本語を学んだ経験があるということがいえる。また、別の調査（1997年 文部科学省調べ）では、中国で日本の大学に入学希望している者を対象に自分の日本語能力をたずねてみると、「読む、書く、聞く、話す」の四技能について、その能力は「十分である」或いは「普通である」という回答が70~80%にも達していたという結果も出ている。かなり自分の日本語能力に自信を持ち、高く評価しているが、これはあくまで主観的な判断であり、証明できるような試験の点数や資格の有無については明らかにされていない。よって、自国にいるその時点で大学に入学できる日本語能力にまで達しているかどうかは不明である。

日本の大学に直接入学した留学生に「日本に留学するまでに特に苦労したこと」を問う調査（平成17年 総務省行政評価局調べ）で、25%の留学生が「日本語の習得」と回答しているという。日本に留学できる日本語能力としては、出願時までにある程度の力（大学での授業に耐えることができ、日本での生活に支障のない程度の日本語能力）をつけておくというのは言うまでもない。日本の大学の多くは、日本語能力を測るために留学生の出願の資格に「日本語能力試験」（1級或いは2級）や「日本留学試験」を課し、その点数を選考の参考にしている。「日本語能力試験」とは、1983年「留学生受入れ10万人計画」における日本語学習者増加に対応するために財団法人日本国際教育協会により国内外の78都市で実施されるようになった試験である。「もともと一般的な日本語能力を測定、証明するための試験」であるため大学で必要とされる用語や会話、表現力を測るものではない。一方、「日本留学試験」は2002年から実施されている留学希望者のための新しい試験で「大学において教育指導を受けるのに必要とされる日本語の理解力、表現力及び専門分野の基礎的な学力等、日本留学のための適正を総合的に評価する」ことを目的としている。日本に留学したいという希望を持った外国人が、自国に居ながらにして日本の大学などから、直接入学許可が得られる制度「渡日前入学許可」の促進を念頭に作られた試験でもある。しかし、新しい試験であるため、海外においては実施されている国が限られており、日

本への留学希望者が多い中国では、まだ行われていない。入管法が緩和され自国から直接大学に入学できる外国人が増えているとは言うものの、国によってはまだまだ困難な状況である。

3. 作文から見る留学生の日本語能力

上記のことをふまえ留学生が入学間もない時期に書いた作文から「文字・語彙（漢字）」「文法」「表現」にどのような日本語運用の特徴、誤用があるかを見ていく。

- ・対象者：2005（平成17）年4月に自国から直接、入学した留学生。（6名）

中国（5名）、韓国（1名）

- ・対象者の日本語学習歴：自国の日本語学習機関で3か月～1年
- ・作文を書いた時期と回数：2005年4月21日～2005年7月10日、6回
- ・誤用例の見方：まず、学生の書いたものを示している。後ろの[]内は正しい言い方を示したものである。（中）、（韓）はそれぞれ、中国、韓国の学生によるものという意味である。

a. 文字・語彙（漢字）

【文字の形が似ているもの】

- たりたい [たいない]（中）
- ウカメ [フカメ]（韓）
- 緊う [緊う]（韓）
- 建う康 [健う康]（韓）

【発音の似ているもの】

- ポリント [プリント]（中）
- 選むのは [選ぶのは]（中）

【母語の影響によると思われるもの（語彙）】

- 誕生日のおみやげ [誕生日のプレゼント]（韓）
- 遊客 [見物客]（中）
- 着服 [着物]（中）
- 信心 [信用]（中）
- 平民 [市民、国民]（中）
- 生活習慣が了解できる [生活習慣が理解できる]（中）
- 拳力する人 [協力する人]（中）
- 大家 [みんな]（中）
- 第一回に祭りを見て [初めて祭りを見て]（中）
- 第一回 日本の試験を受ける [初めて日本の（大学の）試験を受ける]（中）
- 多い注意しよう [よく注意しよう]（韓）
- 学生が多くきてにぎやか [学生がたくさんきてにぎやか]（中）
- 多い売り場があった [たくさん売り場があった]（中）

- 先生に多い日本人の生活習慣を習った [先生にたくさんの日本人の生活習慣を習った] (中)
- 先、窓を開けます [まず、窓を開けます] (韓)
- 友誼会 [交流会] (中)

【母語の影響によると思われるもの (漢字)】

- 市場を離れました [離れる] (中) ○ 時間 [時間] (中)
- 海を看られる [見られる] (中) ○ 后期 [後期] (中)

b. 文法

- 日本の生活が慣れる [日本の生活に慣れる] (中)
- 感情を出ていました [感情が出ていました] (中)
- ~へ行て [~へ行って] (中) ○ 魚が見せる [魚が見られる] (中)
- 楽しいでした [楽しかったです] (中)
- ~するしかないでした [するしかありませんでした] (中)
- 招待させました [招待されました] (中)
- ひまようです [ひまなようです] (中)
- ~に着いたばかり自己紹介しました [~に着いてすぐ自己紹介しました] (中)

c. 表現

- この方面について [このことについて] (中)
- 感慨を催しました [感慨をおぼえました] (中)
- けがを包んでくれる [けがを手当てしてくれる] (中)

4. 分析

日本語教育における作文指導は、日本語能力を向上させるための練習の一つとして比較的早い段階から、文型練習の応用と発展のために行われる。初級レベルの作文は、既習文型（文法）や語彙を用いた短文であることがほとんどである。そのため、テーマを与えず自由に書かせた作文は短文を羅列していて、全体的に論旨のつかみにくいものとなりやすい。また、言いたいことや考えることが高度であるのに対して、日本語能力が劣るために生じるバランスの悪さというものも感じられる。ここに取り上げた例は全て、テーマを与えた書かせた作文に表れたものである。したがって、語彙、表現、文法に誤用があっても何を言いたいのかは十分理解できるものであった。以下、各項目についてその特徴を見ていく。

a. 文字・語彙（漢字）について

ここに見られた誤用の特徴は、文字では【文字の形が似ているもの】と【発音の似ているもの】とに大別できた。まず、文字の形がにているものでは韓国の学生の方に誤用が多く見られ、やはり、漢字などを一種の図形として視覚的に捉えており、実際にはない漢字を作り出したのではないかということが窺えた。全体的には、ひらがな・カタカナは字体の形状が似ているもの、漢字では偏や旁が同じもの、或いは全体の形が似ているものを間違いやすいようである。【発音の似ているもの】は、誤用例が2例しか見られなかったが、母音や子音が同じために発音が近くなってしまい、誤用が生じたものと考えられる。

語彙は【母語の影響によると思われる】誤用が多く見られ、中国、韓国それぞれ自国での表現をそのまま日本語に置き換えているという特徴が出ている。特に形容詞「多い」については一度に4例も現れた。【母語の影響によると思われるもの（漢字）】は中国の学生の特徴とも言えるが、書きなれている自国での漢字を混用しているということがわかる。

文字や語彙の誤用からは、何を言いたいか理解できないものや文章の大部分を修正しなければならぬというようなものは見られなかった。ここに見られる誤用の特徴は、来日間もない留学生たちが自国の言葉で考え、それを日本語に置き換えようとした際に生じたずれだということが読み手にもすぐにわかるものである。

b. 文法について

文法に見られる特徴としてまず、助詞、動詞・形容詞の活用の誤用が挙げられる。ここに見られる例は基本的な文法が未習であったり、既習であってもしっかり定着していないことによる誤用である。自国で多少の日本語は学んできたとは言うものの、習ったことを使って何かをするというような経験は日本にいる場合に比べ乏しいものである。これは「日本語を使う」という経験を積むことで定着していくことであろう。

「魚が見せる」は可能表現で表すところを使役表現を使ってしまった例である。「招待させました」も学生が言いたかったことは使役表現ではなく、「招待されました」と受身表現であり、これらの誤用は動詞の活用もさることながら、動作主が誰なのか、自分がどの視点に立っているのか、しっかりと焦点を定めていなかったために生じた誤用ではないかと考えた。というのも、これらを書いた学生の作文では、度々自分の他に人物が登場した場合、自分自身の動作もその人物の視点から見られたように書かれていることがあったからである。学生に確認したところ、本人は全て自分の視点から書いているつもりでいた。過去形、過去否定形の誤用は形の変化に規則があるので単純な文型練習の時には間違いはあまり目立たず、学生も簡単だと感じることが多い。しかし、書きたいことが先行する作文の場合、基本的な文法事項であっても規則に注意が払

われていない場合間違えることとなる。言うまでもなく、この時点の学生では日本語の文法は知らないことの方が多い。知識として知っていることはあっても似ているものについては使い分けまでできない。書きたい内容が高度で難しい場合は特に、既習事項からの類推によるとおもわれる誤用が多いようである。

c. 表現

ここに見られた誤用は3例であった。「この方面について」の「方面」は中国語の表現をそのまま日本語の表現に当てはめたものである。「感慨を催す」「けがを包む」という表現は母語での表現を辞書で調べ直したものである。日本語では慣用的な表現で表したり、中国語とは別の表現を用いることを知らなかったために生じた誤用である。

5. 日本語能力向上のために

日本の大学では10万人計画を達成した今、留学生の質を向上させるという提言がようやく出始めた。大学に入学しようとする外国人には専門の如何を問わず、修学の目的で日本に長期滞在するに相応しい日本語能力を備えていることが不可欠と言わざるを得ない。自国では日本語を学んでも、それをすぐに「話す、聞く」などして活かせる場がない。よって「書く、読む」こと中心の勉強に偏る傾向があるかもしれない。反対に「話す、聞く」ことは日本での滞在中、常に身のまわりにあって生活の中で自然に触れることができるものである。大学という場では特に「書く」ことを求められる場合が多いので「書く」ことを積み重ねる努力もしなければならないであろう。特に中国人留学生の場合、レベルが向上しても自国で使用した漢字をいつまでたっても使い続けるということが多々ある。また、中上級レベルでは「だ、である」体と、初級のころから慣れ親しんだ「です、ます」体を混同し文体が統一されていなかったり、書き言葉と話し言葉の混同も現れる。このような現象が現れてくると、学生は自分の日本語が大学に入った時に比べ、どの程度伸びたのか不安になるという。習い始めたばかりの頃は順調に日本語を積み上げていたのに、レベルが上がった途端自分の日本語能力が停滞していると感じるのである。「話す場」では語彙や文法に誤用があっても聞き手に全くわからないということがない限り一つ一つ修正はおこなわれない。しかし、「書く」ことは誤用が文字として残るために読み手に容赦なく修正されていく。

ここに取り上げた、来日間もない留学生の日本語作文に見られた誤用例は何らかの形で母語の影響を受けているものが多かった。これはやはり、母語から日本語への切り替えが未熟なことから、日本語で書く場合に母語から類推していることによるものだと考えた。したがって日本での生活が長くなるにしたがってこれらは徐々に改善されていくと思われる。指導する側の今後の課

題は大学での勉強に支障のない日本語能力を身につけられるよう日本語の伸び悩みを克服することである。

《参考文献・資料》

- ・総務省行政評価局 『留学生の受入れ推進施策に関する政策評価』(2005)
- ・独立行政法人 日本学生支援機構 「日本留学のための新たな試験 最終報告」(2005)
- ・文部科学省 『留学生の入学選考の改善方策について』(1997)
- ・横田 雅弘／白土 悟 『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版 (2004)
- ・石田 敏子 「書き方の指導」『改訂新版 日本語教授法』大修館書店 (1995)
- ・水谷 信子 「作文教育」『日本語教育 94号 展望』日本語教育学会 (1997)
- ・奥村 訓代 「大学の学部における日本語教育の指名と役割」『日本語教育 126号』日本語教育学会 (2005)